

三年ぶりにニューヨークに来ている。前衛音楽界の重鎮ジョン・ゾーンが運営するスペース「ストーン」で演奏するためだ。マンハッタンのロウアーイーストサイドにあるこのスペースは満席でも六〇人しか入らない。入場料は一五ドル。これじゃ採算が取れないんじゃないかと思われるかもしれない。でも、ミュージシャンの経済学を舐めるなかれ。この小さなスペースは一〇年以上も続いている上に、世界中の一流ミュージシャンたちが連日出演しているのだ。

簡単な仕組みを説明しよう。ここでは毎週一名、ジョンが指名したレジデンス・ミュージシャン自らが、毎日二セット、六日間で合計一二の異なるライブのセットを共演者の人選や楽器のセットアップも含め全て自分でオーガナイズする。今回はわたしがレジデンスに指名されたというわけだ。家賃はジョンが自腹で半分を、残り半分は有志のミュージシャンたちが定期的にここでベネフィット・コンサートをやって補う。会場のケアは地元のミュージシャンたちや有志がボランティアで務めている。飲み物や食べ物のサービスもなければ宣伝や広告もなし。看板すらない。こうしてお客さんの入場料全額が出演者に渡される。

一日に二公演だから一五ドルの入場料で仮に



絵・江口修平

ミュージシャンの経済学

大友良英

満席だとして一八〇〇ドル。これを六日間やれば一万ドルだ。これなら交通費とギヤラくらいは捻出出来そう。とはいえ、この額が全部一人の懐に入るわけじゃない。毎セット何人かの共演者がいて、彼らのギヤラを考えると実際手元に残るのはこの四分の一程度。一週間でこの額は決していい稼ぎとはいえない。それでも皆「ストーン」でやるのは、ジョンや周辺のミュージシャンたちがそうやって運営していることを知っている、ここで演奏出来る事を誇りに思っているからなんだと思う。

共演の地元のミュージシャンたちは、みな山分けのギヤラを遠慮して返そうとしてくる。日本から来たわたしが赤字であることを知っているからだ。でもそこで返されたら男がすたるっでもんだ。なんだかんだ言っても、僕ら音楽家の根っこには、帽子でお金を集めるストリートミュージシャンの生き方が残っているんだと思う。目の前で帽子の中のお金を山分けするのが気持ちがいい。実にシンプルな経済学……と言いたいけど、そのまま何処かに呑み込んで派手にやってしまうと、物価の上がつたマンハッタン、結局は手元に残らないなんて日も。ミュージシャンの経済学なんてタイトルにしたけど、これじゃお話にならないってオチで。



おともよしひで●音楽家。1959年横浜生まれ。実験的な音楽からNHKの連続ドラマ「あまちゃん」の劇伴まで、その作風は多種多様。震災後は10代を過ごした福島でプロジェクトFUKUSHIMA!を立ち上げるなど、音楽におさまらない活動でも注目される。2014年音楽でアジアのネットワークを作るアンサンブルズ・アジアのアーティストック・ディレクターに就任する。